

眺めが変わる

川口 ひろ子

山手通り沿いのマンション七階に住んで四〇年になる。渋谷区の外れにありすぐ先は東大の駒場キャンパスだ。車の騒音には閉口するが、春は桜、夏は多摩川の花火、冬は夕焼け空に浮かぶ富士山、等、西南に向けた部屋からの眺めは最高、そして、崖下に広がる駒場の森の濃い緑は、疲れた心を鎮めてくれて有難い。

以前、通りに沿って向い側には外国人向けの住宅（空家）が建っていた。何時の頃からかPR会社が入居し、次に関西のアパレルの支社がやってきた。知人の紹介で暫くこの会社を手伝ったことがある。時あたかもバブル最盛期、作る商品は次々に売れて気持よく仕事をさせてもらった。全館事務所風に改装されていたが、二階は元々寝室だったのだろう。広いバスルームとウォークインクローゼットがそのまま残っていて、好奇心旺盛の私は、昔見た映画の中の憧れのアメリカ生活の現物がそこにあるの見たまらない。特に用もないのに頻繁に出入りして喜んでた。驚いたのは山手通りを大型車が通る度に震度二程度に家が揺れることだ。これが原因か否かは不明だがアパレル支社は六年程で移転、その後入居の数社も移転して家屋は解体され、跡地は駐車場となった。駐車場は好調にもかかわらず二〇二〇年末に営業を停止、後ろの土地を併合してマンションが建つという。

アメリカ人向けの賃貸住宅が残る戦後を引きずった時代、元気な会社が目まぐるしく入れ替わったバブルの時代、地下に山手トンネルが開通して大型車の往来がなくなり地上の景色が一変した時代、駐車場が繁盛した昨年末まで、東京がダイナミックに変わる様を眺めて大いに社会勉強させてもらった。残念乍ら、マンションが建ち、富士山、桜、花火、と共にすべてがリセットされるのだ。

他人様の土地を見下ろしてあれこれ想像を巡らして毎日を楽しんだ。「もっと」と望む私にお構いなく世の中は変わり眺めも変わる。現実をしっかりと受け入れて次なる楽しみを見つけるとしよう。

